7/12 県福

海洋放出「容認できぬ」

経産相説明受け福島漁業者

西村康稔経済産業相は十一日、福島県漁業協同組合連合会（県漁連、福島県いわき市）を訪れ、東京電力福島第一原発の処理水の海洋放出計画を検証した国際原子力機関（IAEA）の包括報告書を説明し、海洋放出に理解を求めた。県漁連の野崎哲会長は終了後に「漁業者として海で操業する観点と、関係者の合意なしには海洋放出しないと約束した点から、容認する立ち位置には立てない」と放出反対を強調した。

政府と東電は二〇一五年、県漁連に「関係者の理解なしには（処理水の）いかなる処分もしない」と約束。放出設備は既に完成しており、政府が目指す「夏ごろ」放出を開始するには、地元漁業者の理解をどうやって得るかが最大の焦点だ。

西村氏は冒頭に「IAEAの包括報告書や原子力規制委員会の使用前検査を通じ、放出前の安全性が確認された」と説明。「廃炉と福島の復興を進めるためには、処理水の処分は避けて通れない課題だ」として理解を求めた。野崎氏は「われわれは基本的に処理水の海洋放出には反対の立ち位置だ」と述べた。出席した漁業関係者によると、説明に理解を示す声もあり「（人体に）影響がなく、理解も得て放出するなら仕方がない」との意見も出た。処理水を保管するタンクの状況や、廃炉作業への不安の声も上がったという。

終了後、野崎氏は「廃炉作業が完全に終わった際に、漁業者がそのまま福島で漁業を存続できている。そうした状況になれば、理解できたという立ち位置に立てる」と表明。西村氏は「漁業者は関係者だ。信頼が深まるよう丁寧に説明したい」とした上で「今日の意見交換で終わりにすることはない」として、説明を継続する考えを示した。

7/12 夏

福島第一 処理水海洋放出

住民「他に方法ないのか」

東京電力福島第一原発で、汚染水を処理した水を海洋放出する設備面の準備が完了し、政府が「夏ごろ」とする開始時期が迫る。6日夜には、福島県会津若松市で、国や東電との住民説明・意見交換会が市民主催で開かれ、会場から「漁業者との約束はどうなるのか」「本当に海洋放出しかないのか」など疑問や怒りの声が噴き出した。（片山夏子）

会場では次々と手が挙がり、怒りの声も多く上がった＝6日、福島県会津若松市で

国と東電の説明会 「漁業者との約束を守って」

市民有志の会が、「会津地方では広く住民を対象とした国や東電による説明や意見交換会がなかった」として、東電と国の担当者を呼んで開催。冒頭に実行委員会の千葉親子さん(75)は「本来ならば、海洋放出の当事者の国と東電が説明会を開き、住民の疑問や不安に応えていただきたかった」と苦言を呈した。

資源エネルギー庁の木野正登参事官は、放出する処理水は国の基準以下に浄化したもので「国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の報告書にあるが、人や環境に与える影響は無視できるほど小さい」と説明した。東電福島第一廃炉推進カンパニーの木元崇宏氏は「廃炉に向け、より安全な状態で溶けた燃料を取り出すには敷地がいる」と話し、敷地確保のために、海洋放出してタンクを撤去する必要があるとした。

これに対し、会津地方に住む農家や元教師、議員など5人の登壇者が次々と質問。「流す放射性物質の総量はどのくらいか」との問いに、東電の木元氏が「タンクの6割5分が2次処理が必要で、今の段階で言うのは難しい。浄化してデータを積み上げる」と答えると、「総量も分からないで流すのか！」「無責任だろう」という声が会場から飛び、賛同の拍手が湧き上がった。

他の方法はないのか、タンクの置き場は作れないかという点については多くの疑問が出た。

米とリンゴ農家の男性は「福島の復興を妨げず、風評や実害を拡大させないためには長期の陸上保管という意見があるが、国や東電も場所があれば同じ気持ちか。また中間貯蔵施設の敷地は使えないのか」と尋ねた。エネ庁の木野氏が「中間貯蔵施設は地権者や双葉や大熊の人の状況を考えると言えない」「原子力施設から放射性廃棄物を運搬したり保管するのは、法律の制約がある」と回答。男性は「福島は原子力緊急事態宣言が出たまま。（一般人の被ばく許容量の20倍の）年間20ミリシーベルトで我慢しろと言っておきながら、ここでは法律を持ち出して我慢せよと言うのか。福島の人の身になって考えてほしい」と憤った。

また東電や国が福島県漁連とした約束の「関係者の理解なくしていかなる処分もしない」の関係者は誰かという質問に、東電の木元氏は「さまざまな関係者がいる。多くの方に説明を尽くす」と返答。これには「理解を得る範囲も分からないのか。丁寧に説明するというが、それには時間がかかるのに夏に流すと言う。少なくとも漁業関係者の理解を得ることは必要だろう」と不信の声が上がった。

会場からも多くの質問が出た。「会津は原発から遠いが、無関心ではいられない。今日は高校生も来た。約束を順守すると言ったのだから必ず守ってほしい」「東電や国は事故の責任を取るべきだ」。賛同する意見に拍手が湧いたり、怒りの声が飛んだり、熱を帯びた2時間半が過ぎた。

友人と参加した近くに住む女性(75)は「県民や漁業者などの理解が得られないままにどんどん進められてきた。放出ありきという不信感が強い」と話した。

実行委員会の片岡輝美さん(62)は最後に「漁業者、市民抜きで放出を勝手に決めないでほしい。計画を中止し、市民を含めた幅広い立場でオープンな協議をし、性急に結論を出さないことを求めます」と訴えた。